

史的変遷からみる幼児教育における音楽活動の特徴 —昭和初期から昭和20年代半ばに注目して—

松本晴子¹

本稿は、幼児教育における音楽活動の内容と保育者の音楽力、指導観について考察したものである。具体的には、『日本幼児保育史』と『大正昭和保育文献集』を中心とした歴史的資料から、宮城学院女子大学(以下本学と略す)に保育者養成機関が設置されることになる以前の我が国における幼児教育における音楽活動の位置付けやその内容、および保育者養成校の概況などを確認した。

その結果、幼児教育、就学前教育に情熱を持って取り組んだ人物の存在と、律動遊戯、表情遊戯、リトミックなどの音楽分野にかかわる指導法を先進的に追求した事例などを整理することができた。また本学において、どのような音楽力を身に付けた保育者を育成することが重要なのかについてもいくつかの示唆が得られた。

Keywords : 音楽活動、遊戯、音楽リズム、土川五郎、倉橋惣三、幼児の音楽指導、保育者養成

1. はじめに

幼稚園や保育所における音楽活動は、子どもの生活と多様な活動を支える役割を果たしている。生活の歌や季節の歌、行事の歌などはおそらく日本中すべての幼稚園や保育所で、重要な教育・保育アイテムとして取り扱われているといっても過言ではない。平成時代となってまもなく四半世紀になろうとしている今日、それぞれの教育・保育機関において自由に選択された歌が歌われていることは自然なことである。また音楽活動の捉えられ方の違いによって、様々なアプローチが行われていても何の問題もない。しかしながら、幼児期だからこそ大切にしたい音楽活動には、時代や地域に左右されない普遍的で根本的なもの、音楽活動の基本に据えるべきものがあることもまた認めざるを得ないだろう。

本稿では、幼稚園で行われてきた音楽活動の内容と保育者養成において音楽技能や指導方法がどのように位置付けられてきたかについて、『日本幼児保育史』と『大正昭和保育文献集』を中心とした昭和初期から昭和20年代半ば頃までの史実

から確認する。

従来、我が国における幼稚園の始まりは明治9年創設の東京女子師範学校附属幼稚園といわれてきたが、その後の調査研究の結果、明治6年に京都に開設された鴨東幼稚園¹⁾ではないかということがわかってきている。我が国の幼児教育、保育の礎である明治期の幼稚園や保育所において、音楽活動がどのように取り扱われていたのかということは興味深く、今日の幼児教育における音楽活動を考える上で重要な示唆を得られるのではないかと期待できるが、本稿では昭和前期(昭和初期から昭和20年代半ばまで)の記録から探っていくこととしたい。これは、本学発達臨床学科の前身である幼稚園教員養成所の開設が昭和29年4月1日、短期大学保育科として発足したのが昭和30年4月1日であることから²⁾、本学に保育者養成機関が設置されることになる以前の幼児教育における音楽活動と、保育者養成の実態について明らかにしたいと考えたことによる。

具体的には、次の3点について考察する。第1に、昭和前期に幼稚園で行われていた保育内容から音楽活動や歌われていた歌を確認し、受け継いでいきたい要点について検討する。第2に、昭和

1. 宮城学院女子大学発達臨床学科

前期の音楽活動の指導方法を整理し、現在の保育者養成校において活用したり応用したりできるかどうかを検討する。第3にこれらをふまえて、幼児に音楽指導を行う場合に必要な専門性をどう捉え、保育者養成校においてどのような音楽力を育成することが重要なのかについて若干の考察を行うこととする。

2. 昭和前期の保育者養成の概観

昭和18年末頃の保育者養成校（当時は保姆養成施設）は、全国に40以上（官公立5校、キリスト教系私立12校、仏教系5校、一般19校）が存在した。宮城県内には、青葉女学院保姆科³⁾、吉田専修女学園保姆科⁴⁾、尚綱女学校専攻部保育科⁵⁾があった。修業年限はキリスト教系の養成校が2年であったものの、他はほとんど1年課程であった。学科科目のなかで全ての保育者養成施設で行われていた科目は、修身、教育、保育、図画、手工、音楽、体育であった。しかし保健学、衛生学、栄養学などの科目の開設が行われていなかったところも存在したことから⁶⁾、修業年限の長短にもよるが、養成校の教育理念の違いによって、教育課程に差が生じたのではないかということが推察される。

戦中戦後は食糧難、物資不足、教材不足のため休校したり、退学者が増えたり、保姆志願者が激減したりと苦しい時代が続いた。尚綱女学校専攻部保育科も昭和23年に一時閉鎖し、昭和30年に短大として再開している。これは本学短期大学保育科の開設とほぼ同時期といえる。

昭和22年、新しい学校教育法が施行され、幼稚園は学校の一つとして位置づけられ保姆の名称から教諭となった。このいきさつについて、次のような興味深い記述がある。

「文部省の調査局長は田中二郎という人でしたが、幼稚園を学校に入れるなんて、とんでもないと言っていました。一方、キンダーガーデンは五歳児でアメリカの学校系統に入っているの、ヘアナンをはじめ、司令部の教育部の人は幼稚園

を学校にいれようと思っていたようでした。

倉橋⁷⁾さんは、幼稚園と小学校は違うから、幼稚園を学校に入れるのはよくないが、そうはいつでも幼稚園を学校からはずしておく、幼稚園がおろそかに取り扱われるので、むしろ学校教育のなかに入れておいて、そのなかで幼稚園の独自性を確立していく努力をした方が、幼稚園の普及のためには有効であると思うがどうかとたずねられたので、私は賛成したものでした。」（国立音楽大学教授副島ハマ談）⁸⁾

この記述から我が国において、幼稚園が文部科学省の管轄になったいきさつのひとつとして、倉橋の影響が大きかったのではないかということが推察される。

昭和22年には新学制に基づき従来の免許は仮免許状となったため、認定講習会が行われ10日間以上総計65時間出席したものに修了証書が授与されることとなった。東京で行われた講習会の講師のメンバーには、新教育法における保育原理の倉橋惣三、幼児遊戯指導の戸倉ハル⁹⁾、幼児の音楽の諸井三郎¹⁰⁾らがいた。幼稚園教員再教育のために戦後の新しい保育内容の研究講座として多数の参加者が集まり熱心に新知識を吸収した。これらの後、幼児教育、就学前教育の重要性が認識され、保育者養成校も増加していくことになるといえる。

3. 昭和前期の音楽に関わる保育内容概観

昭和前期の幼稚園教育における保育内容は、大正15年公布の「幼稚園令施行規則」で「幼稚園の保育項目ハ遊戯、唱歌、観察、談話、手技等トス」（第二条）と定められたことによって、「保育五項目」として多くの幼稚園の保育内容の中心となっていた¹¹⁾。この五項目の中から音楽活動、音楽指導と関連が深いと思われる遊戯と唱歌についてみてみたい。

遊戯の内容としては、自由に遊ぶものと音楽を伴う遊戯の2つが考えられていた。自由に遊ぶものが遊戯とされていたのは、保育課程の多くは一

般に自由に遊ぶ活動であり、生活の中心となる遊びを通しての保育効果が期待されていた¹²⁾ ことからと思われる。自由に遊ぶものの内容には、ブランコ、すべり台、砂場などの遊具を介した遊びと模倣遊戯といわれる電車ごっこ、お店ごっこなどのごっこ遊び、落葉拾いやひなたぼっこなどの郊外散歩や凧揚げ、輪取り、積木、絵本よみ、お絵かきも含まれている。

音楽を伴う遊戯には、大別すると行進遊戯と唱歌遊戯の二つがあった¹³⁾。唱歌遊戯は歌詞を伴い歌の感じを表現するもの、歌のリズムと音に従って動くもので、《桃太郎》、《金太郎》、《鳩ぼっぼ》、《お手々をつないで》などが含まれていた。歌詞に合わせる動作のため、動きが偏ったり子どもの感情、感動を顧慮しない動きになりがちな場合もあったようである。しかしながら、唱歌遊戯は明治期からすでに多くの幼稚園で実践されていた。

行進遊戯は歌を伴わない楽曲のリズムと音に合わせて気持ちを出して動くものことで、これを土川五郎は律動遊戯と名付け¹⁴⁾ 56 曲を作成している¹⁵⁾。用いた音楽には2つのタイプがあり1つは、作曲者の名前が無記名のもので、もう1つは、外国の曲もしくは作曲者に作曲を依頼した楽曲と思われるものである。作曲者が無記名のものには、音の高低やリズム、拍子そのものに合わせて動く《強き歩み》、《軽き歩み》、《駈足》、《すり足》、《跳躍 (ポップスキップス)》、《通常歩 (四歩目=跳躍)》、《三柏 [ママ] 子》など14 曲と《櫻》、《小さき汽車》、《影法師》などタイトルを意識した動作を示した10 曲がある。外国の曲もしくは作曲者に依頼したものは楽曲に合わせた動作を明示したもので、《かいぐり》、《海》、《おいてきぼり》、《水兵》(資料参照)¹⁶⁾ など32 曲ある。土川は遊戯の特徴を、音楽が伴うために快感が起こり、自発的に踊ろうとする気持ちが出てくると考え、メロディーとリズム、音楽そのものを重要視していた。これは、遊戯は子どもの心理、子どもの感情と生理の上から立って行われるものとして、身体と感情の教育を

結び付けるもの、感情教育、美的教育、情操を養うものと捉えていた¹⁷⁾ ことから推察される。子どもが子どもの気持ち、子どもの感情のままに音楽やリズムに合わせて自由に楽しく表現するひとつとして遊戯を考えていたといえよう。音楽は子どもの心を通じて身体に及ぼすものであり、音楽と身体の動きは相互作用するものとして、音楽を伴う遊戯の重要性と子どもの感情が表出される子ども自身が楽しむ遊戯であることを提唱したのである。

また土川は、人間の身体や心、生活、仕事、自然界などすべてがリズムに関わることに着目し、リズムは子どもに対しても良い効果をもたらすことを記している¹⁸⁾。この考え方を引き継ぎ発展させたのが、小林宗作¹⁹⁾ のリズムによる教育といえよう。小林はリズムによる教育、リズム教育こそが、リズムの支配を受ける人間のすべての機能の発達を助け神経作用を発達させると考えた。さらに、リズム教育は人間の芸術と生活を頽廃から救ってくれる唯一の道であり、生理的、心理的、芸術的基礎の上に、最も経済的に哲学的に人生と自然とを調和し同和するものと述べている²⁰⁾。そして幼児期に音楽を経験させリズムを理解させることが大切であり、方法としてリトミックに着目した。リトミックとは心と体にリズムを理解させる遊戯であり、体の機械組織をさらに精巧にするための遊戯、心に運転術を教える遊戯であるとした²¹⁾。小林の意味する遊戯は、多様なリズムと即興をも含む自由な音楽に合わせた動きと推察できる。なおここでは、小林の提唱したリトミック研究そのものに言及することは控えるが、幼児教育にはリトミックが有効であると確信を持った経緯や日本の幼児にあったリトミックの内容や方法を考案したことなどについては今後の研究課題としたい。

この頃、戸倉ハルも活躍していたが、戸倉は唱歌遊戯、童謡遊戯、表情遊戯と名称を変化させながらも、内容は同じもので歌を伴う遊戯の方に力を注いだ。一寸法師、浦島太郎、兎と亀、牛若丸、猿蟹合戦、因幡兎などの昔話を題材としたものや

春夏秋冬の歌に合わせて踊る遊戯を著書²²⁾にまとめている。内容は遊び方の説明であり、メロディーやリズムに合わせた身体表現というよりは、唱歌遊戯の特徴ともいえる歌詞に表わされた情景の描写を身体表現する手順を示したものである。

幼稚園で唱歌遊戯を行う場合、例えば一寸法師の遊戯を行う時は、一寸法師の歌の練習をすることが多かった。そのため歌に振り付けて踊る「遊戯」を「唱歌」と区別することが困難な幼稚園が多くあり、この二つの項目をまとめて「唱歌・遊戯」あるいは「唱遊」と呼ぶこともあった²³⁾。遊戯活動のための楽器は、保育室のオルガン、遊戯室のピアノ、タンバリンなどであったが、レコードやラジオや蓄音器の発達によりこれらに合わせて踊ることも行われた。

このように昭和前期の音楽を伴う遊戯は、土川、小林、戸倉などがそれぞれの教育理念に基づき、それぞれの遊戯の捉え方と方法で、律動遊戯や唱歌遊戯の普及に尽力し、幼稚園や保育所における遊戯の指導を活性化させた。しかしながら律動遊戯と唱歌遊戯は内容的に異なることから、幼稚園や保育所においては、教師などの経験や研修の質などによって、遊戯への取り組みに違いが生じてきていたことが推察される。現在は、小林の提唱したリトミックやそれと似通った活動を取り入れている幼稚園の音楽活動を時折みることができるが、どちらかという、リズムや楽曲に合わせて指導者が考案した動作を反応よく動くことが重んじられているように思われる。土川や小林が理念の根拠としていたリズムを心と身体で感じ子どもが自由に表現するという最も大事な部分を受け継いだ取り組みを忘れてはならないと考える。

次に唱歌についてみてみると、唱歌活動で歌われていた楽曲は、幼児にわかりやすい歌詞のものである。《チューリップ》、《かたつむり》、《はとぼっぼ》、《こいのぼり》、《むすんでひらいて》、《赤い鳥小鳥》、《夕やけこやけ》、《くつがなる》、《めだかの学校》、《ほたる》、《どんぐりころころ》、《お手々つないで》、《肩たたき》、《七つの子》、《ぎんぎんざらざら

》、《たきび》、《お正月》、《ゆりかご》、《春よ来い》など現在でも歌われているものが多い。歌い継がれてきている特徴として、幼児の心情に適合したかりやすい歌詞、言葉の繰り返しや擬音語、擬態語などの要素を持っていることが確認できる。

キリスト教系の幼稚園では讃美歌がよく歌われていた。また昭和の初めは子守唄が、昭和前期の後半では《愛国行進曲》《太平洋行進曲》のような行進曲も歌われていた²⁴⁾。遊戯との関連で昔話の《桃太郎》《一寸法師》などもよく歌われていたのは前述のとおりである。

唱歌のための楽器は、保育室のオルガン、遊戯室のピアノであった。昭和の初期にはピアノを弾ける保育者が非常にすくなかったため、保育終了後、遅くまで残ってピアノを練習する姿が多く見られた。

タンバリン、カスタネット、トライアングル、太鼓などの楽器の普及やレコードやラジオの発達から、幼稚園によっては唱歌から一步進んだ音楽指導が行われるようになり、唱歌といわず音楽と童謡の二つの項目を設ける園や、音楽の水準を少しでも高めたいと良い曲を選んでピアノ、ラジオまたはレコードによって鑑賞させたり、音感教育を年少、年長を通じて熱心に取り組んだりする園もあったが、歌を歌わせているだけの園も少なかつた²⁵⁾。また蓄音器が発達すると蓄音器の歌に合わせて歌ったりレコードやラジオを聴いたりする活動も行われた。

東京女子高等師範学校附属幼稚園に二十余年勤務した坂内ミツは、その体験をまとめているが²⁶⁾、唱歌の部分に注目してみると、唱歌には歌う唱歌と聞かせる音楽が含まれているとし、歌わせる歌はなるべくやさしいものがよいこと、小学校の教材になっている歌はなるべく避けた方がよいことを述べている。幼児の音域、音程や歌詞の内容を考えて、自分が担当する子どもの興味や関心に適した歌を選ぶよう提唱している。また、聞いて楽しみ、美的情操を養うには、味わう力が無くてもよいから、良い音楽を教師も子どもと一緒に

うっとり聞き入ることを推奨している。良い音楽については具体的に述べられていないので、坂内がどのような音楽を念頭に置いていたかは明確にはわからないものの、子どもだからといってやさしい童謡ばかりを選ぶ必要がないという記述から、聞かせる音楽の楽曲として、西洋クラシックなどを意識していたのではないかということが推測される。

なお昭和10年代から第二次大戦中にかけては、音感教育がさかんに行われた。これは表現力を伸ばすため、情操教育のためというよりは、戦争のための耳の訓練をするため、飛行機の敵味方などを音で聞き分けるためであった。ハホト、ハヘイ、ロトなどの和音感訓練や音名指導を「音あてごっこ」などのような形で行ったり、リズムで警報時の避難訓練を行っていた園もあった²⁷⁾。この時期よく歌われていた曲が、「僕は軍人大好きよ」、「兵隊さんよありがとう」などであったことから²⁸⁾、昭和10年代から20年代初期の幼稚園における音楽活動は、戦争によって翻弄されていたともいえる。

現在の幼稚園や保育所における遊戯は、おゆうぎ会としてCDなどの音響機器に合わせて踊る形が多い。音楽活動は、発表会や運動会などに向けて鍵盤ハーモニカを用いて合奏が行われたり、マーチングバンドが行われたりなど保護者に見てもらうため保護者へアピールするための活動として取り込まれていることが多い。もちろん、保護者へのアピールとして音楽活動が役に立つことは喜ばしいことであるが、大切なのは日々の保育における音楽活動であり音楽指導である。歌を歌う場合も形式的にただ歌わせすることに終始したり、元気がよければそれでよしとしたり、あるいは声帯の発達や歌詞の内容から小学生の中学年以上向きと思われる楽曲を幼児に歌わせたりなどにならないようにしたいものである。ひとつの曲を歌うにあたっては身体表現を伴わせたり、音の高低、リズム、強弱に耳を澄ませたりなどの工夫を加えたりしながら、子どもが音楽を気持ちよいものと感じたり、音楽に合わせて身体表現したり歌った

りすることに喜びを感じる気持ちを育てていくことが求められていると考える。

4. 昭和前期の音楽指導方法

幼稚園や保育所の子どもはさわがしくなりがちなことから、昭和前期には「気分整理」ということがよく言われ保育室に入ると、まず「むすんでひらいて」をすることにしてしている園が多かった。「むすんでひらいて」の歌詞の最後の部分を、その手を膝にと歌わせて、手を膝に置かせて教師の方を注目させたものだった²⁹⁾。保育内容は歌を歌うことがほとんどであったものの、レコードで名曲を時々聞かせることを行っていた園もあった。

保育方法としては、子どものしたいことを自由にさせる、興味のあることだけをするということとは比較的少なく、決められた一定の内容をどの子どもにもさせるということが行われていた。子どものなかのリーダーに合わせて踊ったり歌ったりすることもあったが、「示範説明」が強調されていたので、保育者が模範を示す方法が一般的であった。これはたとえば、子どもに歌わせたい歌を保育者が歌うと子どもたちがまわりに集まってきて自然に歌いだすというものである。保育者が子どもと一緒に楽しく歌うように努めることによって、子どもは歌詞を自然に覚え、よるこんで歌うようになり情操的にも有効だったようである。良き模範を示して歌いたいとか、踊りたいというような感興を湧かせて、自然に歌ったり踊ったりする方法、子どもの心身を刺激して動く興味を湧かせることから、子どもが自発的に自然に活動するようにもっていく方法が強調された³⁰⁾。

この当時、保育室にはオルガンがありオルガンによる指導であったが、オルガンは貴重なものであったため子どもにオルガンを触らせることはなかったようである。遊戯はピアノで弾く場合が多く曲に合わせて遊戯したりリズムに合わせて動いたり、体育的な要素が強かった。

昭和前期はピアノが弾けるというだけで頼まれて幼稚園教諭になる場合もあったようであるが、保育後に一人残って遅くまでピアノを練習する保

母もいたり、みんな熱心でよく研究をしていた。たとえば、大阪市保育会では、実技の研修会を行い5月には全員が5月の歌を弾けるようにしておき、〇〇幼稚園と言われたらそこに出て弾くということを行っていた。そのため弾けるようになるまで練習して参加していた。さらに唱歌集を作ったりもしていた³¹⁾。今日のようにピアノの普及率が高くなく、オルガンも高価であったため、保育者はピアノが弾けるようになるために、幼稚園や保育所のピアノやオルガンで練習を積み技能の向上を目指していたことが推測される。

現在は保育者養成大学のほとんどで、ピアノの練習室やキーボードなどが常備され、ある程度の音楽技能の指導はなされている。ピアノやキーボードを持っている学生も多い。恵まれた環境ではあるものの、昭和前期の保育者がピアノの技能習得のために努力した取り組みのような熱心さは、少なくなっているように思う。しかし時代が変わっても、子どもに正確に歌を教えたり一緒に歌ったりするためには、ピアノの技能と歌唱力は必要な技術であることには違いがない。音楽指導では、模倣、真似させることも大切な指導方法であることをふまえるとき、保育者自身の音楽的技術を磨くことは、今後も求められ続けていく。それと同時に幼児の歌声や歌い方に耳を澄まし、楽譜に正確に表現できるよう導くことも忘れてはならないと考える。

5. 音楽を指導するにあたって重要なこと

幼児教育において音楽活動が大きな位置を占めてきたことや幼児期にふさわしい歌の特徴については確認できた。そこで、音楽活動を展開する指導者としての専門性と求められる音楽力を整理したい。

倉橋は就学前教育の目的は、知能の早い獲得ではなく生命が発展していく勢いの増進と統制にあり、元気や多方面への興味や不断の試行であるとしている。そして年齢に相応した適度な自己統制などの生活活力を育てること、根の力、自己発力を育てること³²⁾としている。指導者自ら嬉し

い時は喜んだり感激したりなどを子どもと一緒に共有する心を持つこと、保育者の表情や姿、行動を見て子どもは心豊かに育つというものである。

幼児の遊戯を考えるにあたって土川は、音楽表現を行うには生活上の役割や芸術上の意味など概念的に熟知しておく必要があるとしている。音楽は人間の生活にどんな役割を果たしているか、子どものための音楽を研究するだけでなく、芸術としての音楽についても知識を深めることが大切であることを示唆している。さらに、子どもの心理や表情にあった教材の選択をすること、子どもが簡単にできる教材で、動きとしては荒削りの彫刻のような教材が重要であること、リズムの違いを区別し動きの違いで表したり、音の高さを動きで表したりなど音楽と動きの関連性に注意を払うこと、子どもの年齢の特性を生かして模倣的、演劇的な要素を持った遊戯を用いること³³⁾なども述べている。

和田実³⁴⁾は教材を選択するにあたっての条件を次の4つ挙げている。第一として教育の目的に統一したものであること、第二に子どもが十分興味を持つものであること、第三には多方多種なるものであること、第四には郷土的なものであることというものである。郷土的特質については、すべてが善とは言えないけれども助長して可なるものが多い³⁵⁾としている。今日、地域の民俗芸能を取り入れている幼稚園や保育所も見られる³⁶⁾ことから、地域に根差した教育活動の意義を見通していたようにも思われる。

これから音楽を指導するにあたっては、ピアノの技能はもちろんのこと、歌唱力や表現力、名曲などの知識、子どもの実態に合った教材選択力と指導方法を工夫する力が求められるといえよう。保育者養成校においては、音楽に関わる限られた授業時間の中で、技能面と知識面はもちろんのこと多様な指導方法を学んだり教材や指導方法を考えたりする授業科目も生かされることが大切となる。

幼児期の保育、教育の根本は、人間の伸びようとする様々な力を重んじて育てることであり、こ

のことは時代が変わっても不変である。善悪の判断や感情のコントロール、集団生活の基礎など人間としての土台となることが、確実に身に着くよう配慮しつつ、遊具や「物に頼る」のではなく保育技術、保育者の教養、人間性そのものを高めることを根底においた保育者養成を目指していきたいものである。

6. おわりに

『日本幼児保育史』と『大正昭和保育文献集』の資料をもとに歴史的視点から、昭和初期から20年代半ばの保育者養成の概況と幼児教育における音楽活動について考察を行った。現在日本の幼児教育の在り方は、幼稚園と保育所をどうするかという議論が先行し幼保一元化、幼保一体化、子ども園など次々と示される提言に揺らいでいる。かつて倉橋は就学前の教育は基本教育であり人生教育の第一段階であるとして、幼児教育も義務化にすべきという考えをもっていたが、就学前の教育を教育機関としてどう位置付け、幼児期には何を大事にするのか、そのために保育者はどのような知識と技術が必要なのかという部分の議論が手薄になっているように思われる。今だからこそ、幼児教育に情熱を持って取り組んでいた先人たちの記録や足跡から学ぶべきことが多々あるのではないだろうか。本稿では迫りきれなかった小林宗作と本学保育者養成に尽力した人々について、今後も継続して研究を進めていきたい。

註

1) 草創期の保育施設、わが国の最初の保育施設については文献、資料がほとんどないために現在も明白になるとは言えない状態である。鴨東幼稚園はわが国最初の禅寺である建仁寺付近に外国人によって創られたらしい。(日本保育学会(2010)『日本幼児保育史』第1巻、日本図書センター、56-57ページ。)なお、保育所の始まりは、明治23年赤沢鍾美による新潟静修学校、のちに守孤扶独幼稚園保護会として発展し、わが国託児所の最初のものといわれている。(日本保育学会(2010)『日本幼児保育史』

第2巻、日本図書センター、114-118ページ。)

- 2) 宮城学院女子短期大学保育科増設設置認可申請書、昭和29年9月25日
- 3) 青葉女学院は聖公会を母体としている。明治42年に東一番丁11番地に敷地を購入し校舎と幼稚園を新築し修業年限2か年で保育者の養成を始めた。その後大正10年に元柳町69番地に移転し昭和15年に閉鎖された。資料は第二次世界大戦の仙台空襲時にほとんど消失してしまい詳細は不明とされているが、大正初期から昭和前期に至る30年間、毎年10名内外の保育者を要請し東北地方における最初で唯一の保姆養成機関として、東北地区の保育界に多大の貢献をしたと思われる。(日本保育学会(2010)『日本幼児保育史』第3巻、日本図書センター、215-216ページ。)
- 4) 吉田専修女学園保姆科は、昭和14年に吉田高等女学校内に設立されたが、昭和20年前後に廃止されている。(前掲書3)、199ページ。)
- 5) 尚綱女学校専攻部保育科は、昭和11年尚綱女学校に創設された。修業年限2か年、募集人員20名であった。翌年全員が検定試験に合格し、以後無試験検定で幼稚園保姆免許が与えられた。(日本保育学会(2010)『日本幼児保育史』第4巻、日本図書センター、204ページ。)
- 6) 前掲書5)、196-198ページ。
- 7) 倉橋惣三(1882-1955)は、教育学者、児童心理学者。東京女子高等師範学校教授、附属幼稚園主事。日本保育学会創設、初代会長。「保育」「幼稚園保育」とは異なる「就学前の教育」ということばを用いた人物と言われている。
- 8) 日本保育学会(2010)『日本幼児保育史』第6巻、日本図書センター、255ページ。
- 9) 戸倉ハル(1896-1968)はダンスや体操の教育者である。東京女子高等師範学校教授として奉職した。
- 10) 諸井三郎(1903-1977)は作曲家。ベートーベンに対する造詣が深くソナタ形式やフーガを含む大形式の楽曲が多い。交響曲5曲、管弦楽曲10曲、協奏曲7曲、ピアノソナタ10曲など多数の作品がある。また純粋対位法や音楽教育論などの著書も多い。文部省視学官も務めた。
- 11) 前掲書5)、11ページ。
- 12) 帝都教育会附属保姆伝習所の昭和12年の保育案には、保育五項目のほかに「自由遊び」を設け冒頭に配列している記録がある。(前掲書5)、71ページ。)

13) 土川五郎 (1978) 「幼児の遊戯」『大正・昭和保育文献集』
第4巻、日本らいぶらり、111 ページ。

表情遊戯という名称を使用した。また、『日本幼児保育史』
第4巻、71 ページには土川は昭和4年から15年まで毎年、
夏季に律動遊戯の全国的な保育講習会を開き普及に努め
たことが記してある (上掲書、111-112 ページ。)

14) 従来の唱歌遊戯を刷新して、リズムと身体の動き、音楽
と身体の動きを結び付けた遊戯として律動遊戯、律動的

水 兵 瀬戸口磯吉作

圖形右向キラナス

水 兵

- 1...2 三歩行進シテ直立ス
- 3... 両手ヲ斜右上ニアグ(食指ヲ出シ他指ヲ握ル) (信號旗ヲ振ル)
- 4... 最モ早ク左下方ニ振り下ロス
- 5...6 三歩前進ス
- 7... 両手ヲ斜左上ニアグ
- 8... 右下方ニ振り下ロス

- 9...12 左向き(圓心=向ヒ)膝ヲ上グル爲メニ胸ヲ引ク
 右手上ニ其手ヲ顔ニ近ヅケテ下方ニ下ロスキ左手ヲ向フヨリアグ(手類ヲアゲ 下ロス
 キ手類ヨリ下ロス)手ノ上ニアルトキ開キ 下ニ行クキ握ル
 カクシテタグリツハ八歩前進ス
- 13...16 全ジク後退ス
- 17... 前半節 両手ヲ腰ニ貼ラ後ロニ兩拳ヲ前ニオモルヲ振りタル如クシ兩手ヲ前キ、下方ニ
 出スル右足一步右へ
 突後半節ニテ兩膝ヲ後方ニ引クト共ニ左足ヲ右足ニ引付ケ
- 18...20 右へ横足三步 滑グコト三回(17ヨリ四回トナル)
- 21...24 左横足ニテ滑グコト四回
- 25... 前半節 左足ヲ右足ノ右ニ膝ヲ少シクユルメ
 後半節ニテ右食指ヲ出シタル右手ヲ右後方ヨリ高ク頭上ニ振り上グルル右向きヲ左足
 足ヲアゲ左足ニテ跳ブ 顔ハヤハ右後上方ヲ見ル
- 26...28 右足ニテ跳ブキ左手(左食指ヲ出シタル)ヲ左后ヒニアグ...初メヨリ四回跳躍行進ス
- 29...30 左向き足踏シフハ輕キ拍手四回内方ニ向ク
- 31... 後半節ニテ強キ足踏二回
- 32... 踵ヲアゲ兩手ヲ開掌ノマハ高ク頭上ニアグ

- 15) 前掲書5)、13-81 ページ。
- 16) この1曲のみ海軍軍楽師で作曲家としても活躍した瀬戸口藤吉(1868-1941)の作品である。土川五郎(1978)「律動遊戯」第壹集、『大正・昭和保育文献集』第4巻、日本らいぶらり、61-62 ページ。下記資料参照。
- 17) 土川五郎(1978)「律動遊戯」第壹集『大正・昭和保育文献集』第4巻、日本らいぶらり、9 ページ。
- 18) 前掲書13)、118-119 ページ。
- 19) 小林宗作(1893-1963)はヨーロッパ留学中の大正12年に新渡戸稲造の薦めでリトミックを知り、ダルクローズ本人に会い直接1年間師事した。帰国後、日本の幼児教育にリトミックを紹介し普及に努めた。
- 20) 小林宗作「総合リズム教育概論」『大正・昭和保育文献集』第4巻、日本らいぶらり、194 ページ。
- 21) 小林宗作「幼な児の為のリズムと教育」『大正・昭和保育文献集』第4巻、日本らいぶらり、201-201 ページ。
- 22) 戸倉ハル 小林つや江(1958)『うたとあそび』第1集、第2集、不昧堂。第1集はすべて歌を伴う曲であるが、第2集には歌を伴わない曲も全体の4分の1ほど編集されている。歌を伴わない曲のあそび方はリズムや音に合わせるというよりは情景描写の身体表現の要素が強い。
- 23) 前掲書5)、第4巻、67 ページ。
- 24) 前掲書5)、第4巻、78-79、144 ページ。
- 25) 前掲書5)、第4巻79 ページ。
- 26) 坂内ミツ(1939)「幼稚園の生活」『大正・昭和保育文献集』第4巻、日本らいぶらり、330-335 ページ。
- 27) 日本保育学会(2010)『日本幼児保育史』第5巻、日本図書センター、94 ページ。
- 28) 上掲書、125-127 ページ。
- 29) 前掲書3)、119-137 ページ。《むすんでひらいて》については、海老沢敏が『むすんでひらいて考』(1986)岩波書店に詳細にルーツなどを記している。
- 30) このような方法は「感興誘発」と言われていた。
- 31) 前掲書3)、138-162 ページ。
- 32) 倉橋惣三(1931)「就学前教育の主目的」『岩波講座教育科学』、岩波書店、37 ページ。
- 33) 前掲書13)、87 ページ。
- 34) 和田実(1876-1954)は、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルと受け継がれてきた自然主義教育を基本に『幼児教育法』を著した。横浜市内の小学校勤務ののち女子高等師範学校助教授、東京府教育会保姆伝習所講師を経て目白幼稚園を開園し園長となった。
- 35) 前掲書5)、第4巻、184-190 ページ。
- 36) 例えば釜石市立第一幼稚園では虎舞に、仙台市立落合保育所では竜神太鼓に取り組んでいる。